

ダンの詩の本文批評と発見された自筆原稿*

久野幸子

Textual Criticism of Donne's Poems
and His Discovered Autograph

Sachiko Kuno

1

1970年4月、ロンドンの競売会社サザビーの^{マニユスクリプト・エキスパート}写本鑑定家のピーター・クロフトが、ジョン・ダン (John Donne, 1572-1631) の書簡詩の自筆原稿を発見した。ダンの自筆原稿は、その時までに38通の散文書簡と彼の蔵書の見返しに書かれた2つのラテン^{レビグラム}警句詩の断片(4行と2行)が発見されていたが、英語で書かれた詩としては、これが初めての発見であった。そこで、6月の競売では、二万三千ポンドで、一旦、大陸の蒐集家の手に落ちたが、^{エキスポート・ライセンス}英国の輸出法にひっかかり、結局、オックスフォード大学のボドリアン図書館が、政府の援助と民間からの協力を得て、二万五千ポンドで入手した。350年以上も前に書かれた自筆原稿であったとはいえ、たった一枚の四つ折版の薄い紙であったから、びっくりするような高値をよんだことになる。

さて、この書簡詩はダンの1633年初版本には、「アミアンより送るケアリー令夫人とエセックス・リッチ夫人への書簡」(“A Letter to Lady Carey, and Mrs Essex Riche From Amyens”)という題で入っている。従来、ダンがサー・ロバート・ドルーリー行と大陸を旅行中、滞在先のアミアンに立ち寄ったサー・ロバート・リッチの勧めで、1612年の1月末から2月の始め頃、面識もなかったらしい彼の二人の姉妹にあてて書いたものと考えられてきた。¹ <美德>と<美>を論じ、二人の女性をそれらの典型として称えるこの詩は、ダンの詩として特に優れたものではない。だが、^{パネジリック・ポエトリー}賞賛詩としては、第一級に属する作品である。

では、この発表された自筆原稿は、どのような意義を持っていたのであろうか。

まず第一には、これまでは類推されているにすぎなかった伝記上の出来事の一つ、ダンが1612年の始め、ケアリー令夫人に書簡詩を送った、ということが実証された。自筆原稿がリッチ家と因縁の深いマンチェスター侯爵家の私文書中から発見されたからである。

第二には、この自筆原稿を書誌学的に検討することによって、ダンがどのような状況でどのように詩をかくのか、について、多くの貴重なデータを得ることができた。

そして、第三に（これが最も重要な意義であるのだが）、この自筆原稿によって、ダンの詩についてのこれまでの本文批評を再検討することができた。何故なら、この自筆原稿は、詩の本文批評が始まって以来殆ど始めて、ダン自筆の詩原稿と多くの写本や刊本との距離の推定を可能にしてくれたからである。そして、この原稿が発見された1970年当時もまだ、ダンの詩の本文批評においては、1912年にサー・ハーバード・グリアソンが確立し、ヘレン・ガードナーとウエズレー・ミルゲイトが継承・発展させたオックスフォード派仮説が大方の支持を得ていたから、この原稿は、オックスフォード派仮説の有効性を具体的に検討する重要な資料ともなった。要するに、これは、ダンの詩の本文批評にとって、画期的な大発見であったのである。

2

さて、自筆原稿との比較に入る前に、ここでは、まずダンの詩の本文批評について、ついでオックスフォード派仮説について、ごく簡単に説明しておきたい。

殆ど同時代を生き、自分の詩集を自ら編んだベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) と違って、ダンは散文作品こそ数冊出版したが、詩作品は『周年追悼詩』(*The Anniversaries*) と二つの短い詩以外、全く出版を許さなかった。彼は詩を出版することを特に嫌っていたのである。そこで、彼の詩は、生前も死後も、写本という形で多く読まれることになった。ピーター・ビールが1980年に編纂した『英国文学手稿総合索引』第一巻 (*The Index of English Literary Manuscripts,*) vol. 1によると、ダンの詩の写本は、特に1620年代から30年代にかけて多くつくられ、16・7世紀の詩人で、彼程写本を多く残した詩人は他にはいないという。² 一方、彼の詩の出版も、死後2年目の1633年より始まるが、初版本ですら、彼の自筆原稿ではなく、当時の写本のいくつかを印刷所原本にしているらしい。1635年版、1649年版等は、初版本とは異なった写本も参照しているという。そこで、ダンの詩の本文批評は、数多くの初期の写本と刊本の校合を、常にその中心課題としてきたのである。

こういう状況にあって、グリアソンは、ダンの詩の版を編むために、37の写本と17世紀中に出版された7つの刊本を集め、詳しく検討した結果、<1633年版の編者は、二つに大別される写本群（グループⅠとグループⅡ）を底本に——グループⅠの写本を中心に、グループⅡの写本で補ったようであるが——もう1つの写本群（グループⅢ）を参照しつつ、綿密な校合の上で、注意深く彼の版を編んだ>という仮説を立てた。そこで、グリアソン自身も、彼が最も信頼できると考えた1633年初版本を底本とし、必要に応じて他の写本も参照するという基本方針で彼の版をつくったのである。³ 以後、ガードナーもミルゲイトも、校合する写本の数を増し、写本の評価や系統樹等を幾分修正したものの、グリアソンの仮説を原理的に正しいものと考え、やはり1633年版を底本としつつ、各々、ダンの詩の版を編纂校訂してきたのである。

3

それでは、この発見された自筆原稿⁴は、オックスフォード派が高く評価する1633年版と、どのような点で一致し、どのような点で異なっていたのであろうか。

まず、本態上の異同 (substantive variant) は、三ヶ所だけであった。1633年版では、“is” (13行目)、“or” (14行目)、“their” (30行目)であったのが、自筆原稿では、各々、“are”、“nor”、“this”となっていた。これらは総て、詩行の意味を左右する異同ではない。

だが、偶有形態 (accidentals) においては、視覚韻 (eye-rhyme)、母韻脱落 (elision)、頭文字化 (capitalization)、句読点 (punctuation) 等で、わずか63行中に40以上もの異同があった。割付 (layout) については、1633年版では、3行づつ、間隔を空けたスタンザに分けられているのに、自筆原稿では、左マージンに三行目ごとに左下から右上に走る斜線がひいてあるだけの、ぎっしり続く (close-knit) 形態になっていた。⁵

以上、私達は、この自筆原稿との比較によって、1633年版は、本態上はダンの原稿にはほぼ近いものの、偶有形態においては、大変隔たっていることを知った。そして、ダン自身についていえば、彼が大変注意深く句読点を使用し、しかも句読点を多用するタイプの詩人であったことを知ったのである。いや、正確には、再確認した、と言うべきなのだろう。何故なら、イブリン・シンプソンが1928年に発表した論文「ダンの句読点についての覚え書き」(“A Note on Donne's Punctuation”) で明解に立証してみせたように、⁶ まだ句読法が安定していなかったエリザベス朝末期、<ダンが珍しく近代的な句読法を修得しており、他の多くの文人と違って、句読点の使用に極めてうるさい人間であった>ことは、実は、ダン研究者の間では、周知の事実であったからである。そこで、先に述べた偶有形態上の異同は、決して見過ごせない、ということになる。例えば、冒頭の12行において、自筆原稿には、コンマが多用され、かつ、スタンザに分けられてはいないので、各単語を各々ゆっくりと読ませながら、全体としては大きな動きによって、論理を力強く展開させようとするダンの意図が感じられるのに、1633年版には、⁷ それを感じられない。これは、ほんの一例であるが、ダンの詩の場合、偶有形態は、詩の本態と常に深いかわりあいを持っているらしいのである。

4

では、自筆原稿と1633年版とのこの違いを、ダンの詩の校訂者や研究者達はどのように受け止めたのであろうか。1972年から翌年にかけて、『タイムズ文芸付録』(TLS) 紙上を中心に論争が続いたが、論争の最大の争点は、<40以上もの偶有形態上の異同をどう説明するのか>と

いうことであった。以下、この争点を中心に、論争を概観してみたい。

まず、A.J.スミスが『タイムズ文芸付録』の1972年1月7日号で、

There is hardly a doubt that this document is the single source of all the variant versions of the poem. Yet none of the early manuscripts or printed texts gives the poem exactly as Donne wrote it here. . . .

There is no obvious pattern in the variation of right and wrong readings between the early copies of the poem, such as might bear out the accepted grouping of the manuscripts, according to their supposed line of descent. Rather, the authentic version cuts right across the groups Grierson established and teases us with the suspicion that we might have rejected it as worthless testimony were it not indisputably in the author's hand.⁸

という大変大胆な発言をした。〈この自筆原稿がこの書簡詩の唯一の原稿である。ところが初期の写本も刊本もこの原稿から派生していないことがわかったのだから、それらを底本としているオックスフォード派仮説は、全面的に見直されるべきだ。〉というのである。

このスミスの挑戦に対し、ガードナーは二週間後、やはり『タイムズ文芸付録』で、〈この発見された自筆原稿は、ダンの草稿であって、彼はこの草稿を令夫人に送り、自ら清書したものを自分の手許に保管した。1633年版等は、その清書原稿から派生した写本の系統に属しているのだから、とくに問題はない。〉と次のように反論した。

Professor Smith asserts that "there is hardly a doubt that this document is the single source of all the variant versions of the poem". In one sense this is true, for the two corrections, on which he does not comment, suggest that this is not a fair copy but the original poem, written *currente calamo*. But is it likely that Donne sent off this letter without taking a copy for himself? . . . It would seem more than merely probable that Donne made a copy of his poem and that it is this copy, with his title above it, that is the source of the manuscript texts.⁹

では、この二人の論争を、他の研究者たちはどのように考えたのであろうか。

まず、スミスの〈自筆原稿が唯一の原稿〉とする説は、殆ど賛成を得られなかった。¹⁰ 伝記上から考えても、この頃のダンが、自分用に草稿か、写しを保管しておく可能性は多いにあったからである。¹¹

では、ガードナー説はどうだろうか。彼女の〈まわりを金で縁取りした上質紙に、ダンが直接に詩を書き、それをケアリー令夫人に送り、自分の為に清書原稿を残した〉という推測も賛成を得られなかった。何故なら、ニコラス・パーカーやクロフト等筆跡鑑定の特権家が指摘するように、¹² 自筆原稿の筆跡そのものが、この原稿が写しであることを有弁に物語っているか

らである。とは言うものの、ガードナーの〈自筆原稿が二つ存在する〉という考え方は、無論、多くの人々の受け入れるところであった。スミスのように、唯一つしかない、と考えなければならぬ理由など、全くないからである。

そこで、私達も、この書簡詩には、ダンの自筆原稿が二つあった、と考えよう。では、これで、1633年版と自筆原稿との違いが総て説明できるだろうか。いや、できまい。63行中に40以上もの偶有形態上の異同というのは、いかにも多過ぎるのでないか。勿論、ダン自身が清書、あるいは写しをつくる際、転写ミスを犯したかもしれないし、加筆修正をした可能性もある。だが、偶有形態だけをこれ程多く修正するだろうか。そんなことはあり得ない。こう考えて、私達は、結局、1633年版編者の偶有形態の扱い方、そして、グリアソン自身の偶有形態、とくに句読点の扱い方を問題としなくてはいけない、ということに気付くのである。

5

グリアソンは1633年版を彼の版の底本として選んだが、次に引用する本文序文での彼の言葉テクスチュアアルイントロダクションが示しているように、無論、句読点をも考慮した上でのことであった。

I do not agree with Mr. Chambers that the punctuation, at any rate of 1633, is 'exceptionally chaotic'. It is sometimes wrong, and in certain poems, as the *Satyres*, it is careless. But as a rule it is excellent on its own principles.¹³

ダンの詩の本文批評におけるグリアソンの功績は実に偉大である。だが、今まで、全く批判がなかったわけではない。例えば、1963年に『周年追悼詩』の版を編んだフランク・マンリーは、次のように異議を唱えている。

As both Grierson and Miss Gardner have pointed out, the editor [of the 1633] had the assistance of a number of excellent manuscript collections, which he used with considerable care and intelligence. For the *Anniversaries*, however, he based his text directly on the 1625 reprint. Despite Grierson's assertion that the editor "compared this [the 1625 text] with earlier editions, probably those of 1611-1612," there is no evidence whatsoever that he saw any edition other than his copy-text. . . . The 1633 is not an exact reprint of the 1625, however. The editor intended to make as good a text as possible. Consequently he corrected mistakes when he saw them, removed obsolete words, modernized old-fashioned spellings, altered capitalization, and entirely repunctuated both poems. The result was the equivalent of a modernized text with no authority whatsoever. Compared with the earlier editions, it marks the greatest divergence from Donne's probable intentions.¹⁴

つまり、マンリーは、1633年版の編者が、自ら選んだ1625年版に、何の根拠もなく、自らの好みで、句読点も含め様々な修正をおこなっていることを知り、こと『周年追悼詩』に関する限り、1633年版は決して信頼すべき版ではない、と断定したのである。

そして、この自筆原稿も、今まで見てきたように、この書簡詩については、1633年版の偶有形態が、ダンの原稿とひどく異なっている、つまり、句読点においては、この版はあまり、信頼できないことを実証してしまったのである。

では、グリアソン自身の句読点の扱い方はどうだろうか。

グリアソンも勿論、ダンが極めて句読点等にうるさい人間であることを知っていた。

Donne, indeed, was exceptionally fastidious about punctuation and such typographical details as capital letters, italics, brackets, &c.¹⁵

だから、彼自身、句読点の扱いには、他の部分と同じ位の時間はかけた、と言明している。

I can only say that I have given to the punctuation of each poem as much time and thought as to any part of the work.¹⁶

しかしながら、グリアソンの句読点の扱い方には問題があった。次の引用に示されているように、彼は基本的には、エリザベス朝の人々は一般に句読点を多用しすぎる、と考えていたから、ダンの詩を編むに際し、ダンが彼の詩に実際にどのように句読点を施したのかを推測し再現すること以上に、彼が選んだ1633年版——これは比較的句読点の少ない刊本であったのだが——の句読法を一貫させることを優先し、彼自身が正しいと考える状態へ、他の写本の裏付けもなしに、修正しているからである。

I have corrected the punctuation where it seemed to me, on its own principles, definitely wrong; and I have, but more sparingly, amended the pointing where it seemed to me to disguise the subtler connexions of Donne's thought or to disturb the rhetoric and rhythm of his verse paragraphs. . . . With all its refinements, Elizabethan punctuation erred by excess. A reader who gives thought and sympathy to a poem does not need all these commands to pause, and they frequently irritate and mislead.¹⁷

グリアソンのこういう句読点の扱い方に対し、ガードナーは、先に引用した『タイムズ文芸付録』の論文の中で、

Professor Smith must be aware of the arguments that have raged in the past

years for and against “old spelling” texts, and that the main argument against them is the spelling and punctuation that editors so meticulously preserve is not the author’s but that of the compositor or of a succession of scribes. Why is he so surprised that Donne’s spelling, capitalization and punctuation have virtually disappeared in the process of manuscript transmission? What else could be expected? The great value of the holograph here is that it should encourage editors to be less respectful to the accidentals of the first edition and to be bolder in emending them in the light of Donne’s practice.¹⁸

と弁護し、上記引用の最終行中の「ダンの習慣に照らして」(“in the light of Donne’s practice”)という語句を、翌月2月に自筆原稿の複製に転写を添えて出版した際の解説の中では、

... to accord with the punctuation of the holograph and of the *Anniversaries*.¹⁹

と書き直している。しかし、実例としては、『周年追悼詩』とこの自筆原稿しかないという限られた状況で、校訂者はどこまでダン自身に成り代って、ダンの詩に句読点が施せるというのだろうか。どれ程すぐれた校訂者であっても、ダン自身にはなり得ないのである。A.J.スミスはこの点を次のように表現しているが、

Donne pointed the poem far more meticulously and subtly than his scribes and editors convey, so as to control its movement and intonation.²⁰

ダンの詩の批評の歴史を考えると、彼の詩の〈韻律〉は、ベン・ジョンソンの例の発言、“that Done for not keeping of accent deserved hanging”²¹以来、T.S.エリオットのダン評価に至るまで、たえず、人々の関心を集めてきている。それ故、私達には、この〈韻律〉と密接にかかわっている句読点を軽々しく扱うことは許されないのではないか。

又、クロフトやビール、バーカー等の写本鑑定家達も、ガードナーの方針に賛成ではない。²² 彼らは、本態上ではなく、偶有形態においてであっても、校訂者がテキストに手を加えず、テキストが校訂者の主観的傾向を帯びてしまうことを警戒しているのである。

以上、1633年版の編者及びグリアソンの句読点の扱い方について考察してみた。そして、共に問題があることがわかった。確かに、レッドパスが言うように、たった一通の書簡詩の自筆原稿が発見されたからといって、私達は、すぐさま、初期写本や刊本への信頼を失うべきではないだろう。²³ だが、発見以前のように、オックスフォード派仮説のみを盲信することができなくなったのも事実である。では、オックスフォード派仮説を見直す為に、私達にはどのよう

な方法があるのでしょうか。ここで、多分、私達は、ダンの詩には、オックスフォード派学者が校合をおこなっていない写本が、現在多数発見されていることを思い出さなくてはならないだろう。

6

先に言及した『英国文学手稿総合索引』第一巻の中で、ピールはダンの詩については、1980年当時、240以上の写本がみつっていると発表した。グリアソンが校合した写本が37であったから、校合すべき写本の数は、1912年からの約70年間に飛躍的に増加しているのである。

勿論、数だけが問題ではない。オックスフォード派仮説には、明らかに刊本重視という偏りがあったから、私達はこの点でも、発想の転換を迫られているのである。ピールのダン写本に関する基本的な考え方は、＜ダンの詩は、本来、写本文化に属するものであって、彼の写本は1633年版の単なる飾り物ではないこと、そして、従来、余り注意を払われなかった雑録中の作品も十分検討しなくてはいけない＞²⁴ というものだが、これらの発言には、写本鑑定家としてのピールが抱いている、オックスフォード派仮説見直しへの大きな期待が窺われよう。

さて、ダンの生誕400年を祝って出版された記念論集 *John Donne: Essays in Celebration* (1972)²⁵ に端的に示されていたように、今世紀後半期におけるダン研究は、前半期のT.S.エリオットや新批評のように、現代的関心からダンを読む、というのではなく、ダンの生きた時代と社会の中に彼の作品を置こうとする、実証的な方向へ向かっている。そこで、本文批評も、実証的傾向を益々強めていると思われる。古文書学も書誌学も大いに進歩し、膨大な量の写本の校合すら、最近の科学技術の発達によって、不可能ではなくなってきた。それ故、現在アメリカにおいて進行中のダンの詩の校本全集作成への努力²⁶は、写本を重視するという基本姿勢からも、実証的研究への時宜になかった果敢な試みといえよう。完成された部厚い校本全集の前に、読者一人一人が各自の読みを選ばなくてはならなくなる。だが、校訂者の主観から解放される意味は極めて大きいに違いない。私達は、ダンを自分達に近づけるのではなく、自分達をダンに近づけようとしているのだから、ダンが自分の詩に自ら施した句読点も尊重したい、いや、尊重しなければならないのである。

結局、発見された自筆原稿は、ダンの詩における偶有形態校訂の難しさを再確認させ、あわせて、本文批評家達に、実証的研究の——具体的には出来るだけ多くの写本のより綿密な校訂の——必要性を更に強く認識させたのであった。

(1988. 1. 11)

注

* 本稿は、阪大英文学会第20回大会（1987年11月8日）において口頭発表したものに一部補筆したものである。

1 R.C.Bald, *John Donne: A Life* (Oxford at the Clarendon Press, 1970) pp. 248-249.

- 2 As if to compensate for the paucity of verse autographs, probably more transcripts of Donne's poems were made than of the verse of any other British poet of the 16th and 17th centuries. Peter Beal, comp., *The Index of English Literary Manuscripts*, vol. 1, 1450-1625 (London, Mansell, 1980) p.245.
- 3 Herbert Grierson ed., *The Poems of John Donne* (Oxford U.P., 1912) vol. II, pp.cxv-cxvi.
- 4 この原稿の発見者 Peter Croft による転写を、彼の *Autograph Poetry in the English Language* (New York, McGraw-Hill, 1973, pp.25-26) から、次に引用しておく。

Madame,

Here, where by all, all Saints invoked are,
 T'were too much Scisme to bee singulare,
 And gainst a practise generall to war;
 yett, turninge to Saints, should my'Humilitee
 To other Saint, then yo^r, directed bee,
 That were to make my Scisme Heresee.
 nor would I bee a Convertite so cold
 As not to tell ytt; If thys bee to bold,
 Pardons are in thys Market cheaply sold.
 where, because Fayth ys in too lowe degree,
 I thought yt some Apostleship in mee,
 To speak things w^{ch} by Fayth alone I see:
 That ys, of yo^r; who are a firmament
 of vertues, where no one ys growen, nor spent;
 Thay'are yo' Materialls, not yo' Ornament.
 Others, whom wee call vertuous, are not so
 In theyr whole Substance, but theyr vertues grow
 But in theyr Humors, and at Seasons show.
 For when through tastles flatt Humilitee,
 In Doe-bakd men, some Harmelesnes wee see,
 Tis but hys Flegme that's vertuous, and not hee.
 so ys the Blood sometymes; who euer ran
 To Danger vnimportund, hee was than
 no better then a Sanguine vertuous Man.
 So Cloystrall Men who in pretence of fear,
 All Contributions to thys Lyfe forbear,
 Haue vertu in Melancholy, and onely there.
 spirituall Cholérique Critiqs, w^{ch} in all
 Religions, find faults, and forgiue no fall,
 Haue, through thys Zeale, vertu, but in theyr Gall.
 we'are thus but parcell-gilt; To Gold we'are growen,
 when vertu ys our Soules Complexione;
 who knowes hys vertues Name, or Place, hath none.
 vertu ys but Aguishe, when tis Seuerall;
 By'Occasion wak'd, and Circumstantiall;
 True vertu ys Soule, allways in all deeds all.
 Thys vertu, thinkinge to giue Dignitee
 To yo' Soule, found there no infirmitee;
 for yo' Soule was as good vertu as shee.
 shee therfore wrought upon thar part of yo^r,
 w^{ch} ys ^{*****} [but litle] lesse then Soule, as shee could doe,
 And soe hath made yo' Beauty vertue too;

Hence comes yt, that yo' Beauty wounds not harts
 As others, wth prophane and Sensuall darts,
 But, as an Influence, vertuous thoughts imparts.
 But if such frinds, by the'honor of yo' Sight
 Grow capable of thys so great a light,
 As to partake yo' vertues, and theyr might,
 what must I thinke that Influence must doe,
 where yt finds Simpathy, and Matter too,
 vertu, and Beauty, of the same stufte, as yo':
 wth ys, yo' noble worthy Sister; shee,
 of whom, if what in thys my extasye [I see,]
 And Reuelation of yo' both, I see,
 I should write here, As in short Galleryes
 The Master at the end large glasses tyes,
 So to present the roome twice to o' eyes,
 So I should giue thys letter length, and say
 That wth I sayd of yo'; There ys no way
 from eyther, but by th'other, not to stray.
 May therfore thys bee'inough to testify
 My true Deuotion, free from flattery.
 He that beleeus himselfe, doth never ly.

To the Honorable lady
 the lady Carew.

- 5 スミスによると、C57にのみ、詩の両側に自筆原稿と同じ斜線が書かれているという。
 A. J. Smith, "A John Donne Poem in Holograph," (*TLS*, 7 January, 1972) p.19.
 6 Evelyn Simpson, "A Note on Donne's Punctuation" (*RES*, IV, 1928) pp.295-300.
 7 グリアソン版の冒頭12行は、1633年版に等しいので、比較参照のために次に引用しておく。

MADAME,

Here where by All All Saints invoked are,
 'Twere too much fchifme to be fingular,
 And 'gainft a praetife generall to warre.

Yet turning to Sain&ts, fould my'humility
 To other Sain&t then you dire&ted bee,
 That were to make my fchifme, herefie.

Nor would I be a Convertite fo cold,
 As not to tell it; If this be too bold,
 Pardons are in this market cheaply fold.

Where, becaufe Faith is in too low degree,
 I thought it fome Apoftlefhip in mee
 To fpeake things which by faith alone I fee.

- 8 Smith, p.19.
- 9 Helen Gardner, "Donne's Verse Letter," (*TLS*, 21 January, 1972) pp.68-69.
- 10 スミス自身も、彼が編んだダンの英詩集の注では、この説を修正している。A.J.Smith ed., *John Donne, The Complete English Poems* (Penguin Books, 1971) p.560.
- 11 Bald, pp.241-242.
- 12 Nicholas Barker, "Donne's 'Letter to the Lady Carey and Mrs. Essex Riche': Text and Facsimile" (*The Book Collector*, 22, 1973) pp.491-492.
Croft, p.26.
- 13 Grierson, p. cxxii.
- 14 Frank Manley ed., *John Donne: The Anniversaries* (John Hopkins Press, 1963) p.56.
- 15 Grierson, p. cxxil.
- 16 Grierson, p. cxxiv.
- 17 Grierson, p. cxxiv.
- 18 Gardner, p.68.
- 19 Helen Gardner, *John Donne's Holograph of 'A Letter to the Lady Carey and Mrs Essex Riche'* (London, Scolar Marsell, in conjunction with The Bodleian Library, Oxford, 1972) p.7.
- 20 Smith, p.560.
- 21 A.J.Smith ed. *John Donne: The Critical Heritage* (Routledge & Kegan Paul, London, 1975) p.69.
- 22 Croft, p.26. Barker, p.489.
- 23 Theodore Redpath ed., *The Songs and Sonets of John Donne*, 2nd ed. (Methuen, 1983) p.xix.
- 24 The large number of extant transcripts (which must be only a fraction of the number once in existence) indicates the extraordinary popularity of Donne's verse in the 17th century; they have obvious editorial importance as witnesses to Donne's text, and they are also a reminder that his verse belonged essentially to a manuscript culture. . . . What should be clear is that the extant MSS of Donne's poems are not mere accessories to the 1633 *Poems*; . . .
.....
- In short, the potential and far-ranging significance of miscellanies should not be underestimated. Peter Beal, pp.245-249.
- 25 A.J.Smith ed., *John Donne: Essays in Celebration* (Methuen & Co Ltd., 1972).
- 26 アメリカでは、1982年から約十年計画で始められたダンの集注本作成計画の一環として、ジョン・ショークロスを中心に、E.W.サリバンとテッド・ラリー・ペブワースがチームを組んで、コンピュータを駆使して、17世紀までの全写本の異読校合をおこなおうとしている。校合する写本の数には250近い。